

新生匠瑳戦略会議（第2回里山・檀林部会） 会議録（概要版）

開催日時：平成24年9月12日（水）

午後7時20分～9時20分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第3委員会室

出席委員：（学識経験者）渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘

（一般公募者）永野亮太、林暁男、八木幸市

（5人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）萱森孝雄

（1人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ（永野部会長）

（省略）

3 議 事

（1）里山・檀林の問題点の整理と方向性について

- ・本日配付している資料は、前回の議論を自分なりにまとめたものである。①里山・檀林を活用した体験型アクティビティスポットを作りたい、②次世代にも残せるような自然と科学が融合した場所にしたい、ということで、コンセプトは「自然と共に生きる」とし、その下に図でまとめてみた。エコツーリズムなどは全国どこにもあるが、実際にうまくいっているのかどうか、他とどのように違うのか、このようなことを外からの目線、つまりお客様目線で本日は考えてみたいと思う。
- ・エコツーリズムは、都心から離れている人にとってはあまり魅力を感じないと思う。毎日都市の生活にどっぷりつかっていて、木や畑のある生活が新鮮に感じる人にとっては魅力的だと思うが、有名だから行ってみたいというレベルでは、1回の訪問で終わってしまう。
- ・都市部の人を対象にするとしたら、神奈川、栃木、群馬方面に比べると、東総地域

は交通アクセスがあまりよくない。観光客を連れてくるとしたら、よほどいいものを作ったり、アピールの方法を考えたりしないと厳しい。

- ・「匝瑳市にしかないからそこへ行く」というコンセプトで人を呼び込みたい。アウトドアが好きな人は、充実した設備より山の中の雰囲気や自分たちで自由にできることの方が魅力に感じるとのこと。しかし、現在の飯高檀林は、一般の人が気軽に足を運べるスポットにはなっていないと思う。
- ・お客様目線で考えてみたときに、匝瑳市固有の資源として、里山に飯高檀林があるが、飯高檀林を知らない人は多いと思う。知らない人にどう魅力をアピールするか、リピーターを増やすにはどうしたらいいか、観光案内所も常に人がいるわけではないので、人を受け入れる体制の整備も必要ではないか。
- ・先ほどから人をたくさん呼び込むという観光の視点で議論している。外から来る人たちの活動を利用するのはいいが、それだけで里山は再生しない。匝瑳市域を広く見たときに、人々の生活や産業などを関連させる中で、里山再生につながるようなシステムを作り、そこで観光客と結びつくようなことを考えたらいいと思う。
- ・地元の人にとっては、困りものをどう利用していくかが問題であり、その際に外からの視点や力が必要になってきて、中間報告のしくみもここで必要になってくる。まず、外から人を呼び込むという視点に立つと、そこに住んで生活している人と地域の産業から見た視点は異なるので、それらを編成替えしていくことが必要である。
- ・実際に山を放棄している人に「山を貸してくれ」と言ってもあまり貸したがない。このまま放っておいたら荒れ放題になってしまうので、所有者をどう説得するかが課題だと思う。
- ・林業組合長に話を聞いたときに、組合でもいろいろ考えてはいるようだが、そこに集まっている人は、みんな山の所有者である。所有者の考える利用方法と、外からの視点による利用方法があって、例えば、所有者が生物多様性を考えることはあまり考えられない。ここが難しいところである。
- ・所有者にとっては、事業を行うことでどのくらいの利益が得られるかが大事であって、そこが明確になればすぐにでも人は集まってくると思う。林業で生活が成り立たないので、結果的に荒れてしまうのである。
- ・地元の生活や生産に密着したものから、外の人も呼べるようなものが生まれるといいと思う。
- ・里山、生活、産業など、本日議論しているようなことを全部ひっくるめて、飯高保育所は何か活用できないだろうか。
- ・里山などの活動を総括するNPOなどの団体が入るべきだと思う。既存の地元の会

が中心となってNPOを立ち上げて、農業体験などのいろいろなアクティビティをそろえて、地元の資源を活用できればいいと思う。都会の人というより、地元の人を巻き込んで、まずは市内で利用していくことを考えてもいいのではないかな。

- ・最終報告は、生活や産業を含めたものを全て組織化するような、そういうフレームワークを作りたいと思っている。すでに個々で努力して活動している人がいるので、それを全て組織化することはできないが、緩やかな連携を考えたい。
- ・実際に活動している人たちをきっかけにして、そこから何か作り出していくべきではないか。実態の中からは新しいものは生まれないと思う。
- ・市内に生産者は多いが、生産者だけが集まっても、生産したものをどうアピールして、どう販売していくかという話につながらない。先日、銚子で話しをしたことは、カツオの食べ方が2種類しかないということで、カツオはよく獲れるが、どう食べるかという工夫がない。これをもっと広げていくしくみが必要ではないか。
- ・ふれあいパーク設立当初は、行政が支援していたと思うが、現在は生産者が販売、流通まで事業領域を拡大している。逆に企業の方も、契約栽培などで流通や生産まで手を伸ばしてきている。
- ・工業製品は機械で大量生産できるが、農業はそうはいかない。そこに価値があるので農業体験などが成り立つのである。
- ・行政から出されている課題の中で、旧米倉分校の利活用があるが、何か利用できそうなものはあるか。
- ・私の職場では、障害者や高齢者が花を育てて販売をしている。種を植えることと水まきぐらいはできるので、花を育ててそれを里山に植えたりすれば、高齢者の活動の場にもなるし、社会貢献にもつながると思う。
- ・最近では福祉と園芸に注目が集まっていて、いろいろなところで研究会が開催されている。成田ではリハビリと農業をむすびつけてやっているところがある。
- ・高齢者たちの交通手段が確保できればどこでも行くし、何でもやるという人は多いので、それが解決できれば旧米倉分校も活動の場になり得ると思う。新しい取り組みを行うと人の目を引くので、こういう体験の場を見に行く観光ツアーを企画しているところもある。
- ・北の里山、南の海岸、そしてその中間地点に商店街があって、ここで何か交流ができないだろうか。
- ・まず、市外に目を向けるより、匝瑳地域内で農業や福祉などが連携して、域内の資源を有効活用し、全体がつながるようなしくみを作ることできれば理想である。
- ・既存の団体を中心に組織化する際に、重要な役割を果たすものを作るとしたら、農

業塾のような組織である。一人で頑張っても動きは起こらないので、そういう活動を集約して、中心となって行政や市民に訴えかける組織を作るべきだと思う。

- ・例えば、農業塾のような組織を立ち上げる際、事務局が事務的に資料を印刷して配るだけではなく、立ち上げ当初から積極的に参加して関わり、熱心に動いてくれる人が行政には必要だと思う。

(2) その他

次回の戦略会議は、10月18日（木）午後7時からの日程で調整する。